

日常着の縫製時間に関する研究(第3報)

大裁ち女物長着の後えりつけ線について

松浦千代子・寺内アヤ子

Time Studies on Sewing Home Wear Part 3.

On the Sewing Line of the Back-collar for Women's Wear.

Chiyoaki MATSUURA and Ayako TERAUCHI

(昭和42年2月1日受理)

I. 緒言

和服＝直線の構成、とは誰しも頷けることと思う。そのうち、そでのたもと、えりつけ線、あわせ長着では襟先などに曲線をあしらって直線の単調、厳肅、硬さなどを和らげて快よい“きもの”として重宝されているようである。

その調和を図るえりつけ線は、女物の着装の観点からも重視する場所であり、その調製も技術を要するところとしている。第1, 2報で縫製に関する全般的な所要時間を研究して来たが、その間、常に感ずる事は、えりつけかたの困難さである。所要時数を主とすれば技術的に劣るし、その逆の場合もしばしば経験するので、今回は大裁ち女物長着の後えりつけ線について技術的考察並びに部分的所要時間を実験することとした。実験の前に、この部分の調製法に関する参考書として現在市販されているもの18種を調べて見ると、

- 1) えり肩明き寸法(でき上り) 8.5 cm が78%で最も多い。
- 2) えり肩明きの切り方は、直線切りが殆んどで曲線切り込み、くりぬきなど。
- 3) 後えりつけ線の作り方は背中心より左右へ2 cm 直線に取る方法と、 $\frac{\text{えり肩明き}}{3}$ の直線が略同率で使われ、その他約6種類の方法がある。

以上でその縫製法は詳細に説明されているが、理論的な説明も根拠も見当らない。であるから初級者は単独で、期待される美しい形を、技術的にも巧みに、調製することは大変困難であって、従って和服調製を敬遠する原因ともなろうかと思われる。そこで古くから歴史を築きながら現在持続している和服の形式をそのまま尊重することにして、理論の裏付けの下に、簡単に調製されしかも体型に沿う美的な線を描く方法を得たので、所要時間と共にここに報告する。

II. 実験

1. 後えりつけ線の決定

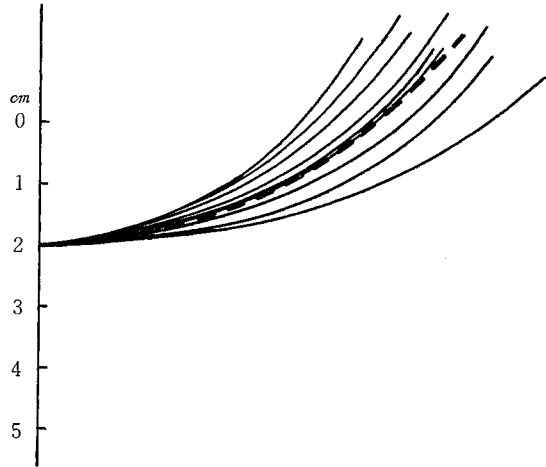
a) えり肩明き寸法について

従来は $\frac{\text{くび廻り}}{4}$ とか、 $\frac{\text{くび廻り}}{6} + 3 \text{ cm}$ 位とか発表されているが、それより人体の Proportion を基盤として考えた方が後方から見た調子を定めるのに適切であると思われる。即ち見掛けの頭幅×2が左右の肩峰点間の投影距離であるから、その $\frac{1}{2}$ を中心に取りれば、頭幅を直降することになり、また肩幅(投影距離)とは2:1になる。その両端からえり幅分だけ斜めに頸に沿うようになるのでよい形となる。

即ち上りえり肩明き寸法 = $\frac{\text{投影距離の肩幅}}{4}$ となる。なお女子大生19~22才, 125名について投影

距離肩幅を測定した結果、32.0～33.0 cm＝16名、33.5～34.0 cm＝31名、34.5～35.0 cm＝36名、35.5～36.8 cm＝31名、36.6～37.0 cm＝11名、総平均34.7 cmであった。これで見ると、33.5～36.0 cm間にある人が78.4%を示しているの、上りえり肩明きとして8.4～9.0 cmの間を使用すればよいと思う。

b) 後えりつけ線の Curve の決め方として、先ず人体のその部分を計測することにした。19～22才までの女子大生50名をランダムに取り、第7頸椎骨を起点とする肩山まで、背中心で1 cmの等間隔5本の平面線を測定した。その結果、50名を類似の形にまとめると9種類できた。その平均値と共に描いた状態の一部を第1図に示した。この線は第7頸椎骨から1 cm下の平面線である。直線は類似の形9種類にまとめたもの、点線はその平均値である。同様にして5本のそれぞれの平面線の平均値を第2図に示した。第2図で見るように、背中心より肩山線の曲線の約 $\frac{1}{3}$ が直線、 $\frac{2}{3}$ が曲線になり、しかも5本の線が殆んど同様の曲線を描いていることが判った。であるからこの $\frac{1}{3}$ の直線状態を利用して後えりつけ線の背中心より取れば体型に合致するから、えり肩明き $\times \frac{1}{3}$ を直線に決めることは妥当であろう。



第1図 背中心から肩山までの平面線；第7頸椎点(O)から2 cm下の計測曲線だけを示す。

c) 肩明きの残りの $\frac{2}{3}$ の取り扱い方については第3図の作図法によって求められる。

FDを半径とする円を描きBDを求めると、

$$\frac{\text{後えりつけ線}}{2} = CD + \widehat{BD} \text{ と}$$

なる。即ちACの縫い込みの多少にかかわらず常に $\frac{\text{後えりつけ線}}{2}$

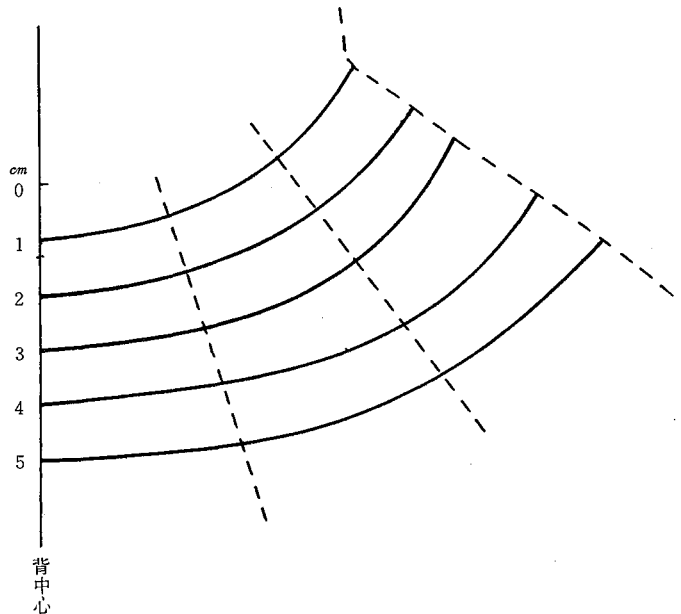
$$= CD + \frac{\pi r \theta}{90} \text{ である。}$$

2. 実際運用

a) 第3図で作図したものをボール紙に取る。

b) 布へしるしつける場合にはえり肩明きの切り込みをする前に、型を置き型通りを縫い線としてしるす。

c) 次に背中心で1 cm 肩山で0.3～0.4 cmのぬいしろを残して型に沿うように切り込



第2図 背中心から肩山まで計測した平均値（第7頸椎点はOにある）

第2表 分散分析表

要 因	S. S.	d. f.	M. S.	F ₀
A	4971.3	5	994.2	
B	13301.8	1	13301.8	**
C	368.5	1	368.5	
D	1803.6	1	1803.6	*
A×B	31600.7	5	6320.1	**
A×C	2656.9	5	531.3	
A×D	5919.0	5	1183.8	
B×C	232.4	1	235.4	
E	11442.6	23	497.4	
T		47		

Aは背中心での、えりつけぬい込み

Cは6区分の縫製取りかかり順序

B, C, は第1表に記載

験のある学生24名を選び、6組に区分し、被験者の半数は B₁ を先に、残りの半数は B₂ を先に着手した。その平均値は第1表に示し、その分散分析表を第2表に示した。

第1表で見るように、背中心のぬい込みの多少に関係なく、同じ木綿地でも比較的薄地の軟かいものが所要時数が少なくなっている。

また背中心のぬい込みとか、この程度の地質の差にかかわらず今回の方法が所要時数が少ないことを表明している。縫製の結果を技術的に調べても今回の方法が目立って優れている。

第2表の分散分析表中、Bは1%の危険率で有意差を表わし、Dは5%の、A×Bは1%の危険率を以ってそれぞれ有意差を示した。これにより背中心のぬい込みが多くなると B₁, B₂ の方法に強く影響し所要時数の開きが大きくなる。即ち今回の方法には背中心のぬい込みの影響は余りないということがいえる。

III. 総 括

本研究では第3図に示した作図法を考案して、後えりつけ線が理論的に考えられ、これを基準として、はおり、コート類にも応用することができたこと。

この部分の縫製が容易に、技術的にも、時間的にも優れていることを示し、最初の目標通りとなった。

本実験に際し終始御懇切なご指導を頂いた本学家政学部市川一夫教授に厚く感謝の意を表します。また身体計測にご協力下さった別役香代子、戸梶美恵子の両姉並びに本学家政学部学生に厚く感謝を致します。

IV. 参 考 文 献

1. 松浦千代子・寺内アヤ子：高知女子大学紀要 自然科学編 11巻 7号 (1963)
2. 同 上 同 上 自然科学編 13巻 9号 (1964)
3. 宮坂和雄他11名：高校被服Ⅰの研究 実習編 教授資料 S. 39. 10 初版。

本研究は日本家政学会、中・四国支部(第13回)総会において発表したもの。

(高知女子大学 家政学部 被服学研究室)